

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	安野 直
論文題目	〈性〉の境界を読み解く—20世紀初頭のロシアにおける女性向け大衆小説とジェンダー
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、20世紀初頭のロシアにおいて絶大な人気を博し、ベストセラー現象を引き起こした女性向け大衆小説の諸作品—アナスタシヤ・ヴェルビツカヤの『幸福の鍵』(1909-13)、エヴドキヤ・ナグロツカヤの『ディオニュソスの怒り』(1910)や『ブロンズの扉のそばで』(1914、およびそのドイツ語版『ブロンズの扉』(1913))、リディヤ・チャールスカヤの少女小説(『寄宿女学校生の日記』(1901)、『小公女ジャヴァーハ』(1903)、『シベリア娘』(1908))等—を主たる分析対象とし、そこで描き出される「男／女」、「異性愛／同性愛」といった〈性〉を巡る二項対立をジェンダー論的アプローチで読解することにより、そうした「規範的な」〈性〉の表象を突き崩していくような、作品にあらわれる「非規範的な」〈性〉のあらわれかたを浮き彫りにするものである。</p> <p>そのさい、本論文が読解の大きな軸とするのは、「近代」社会の基盤にある「[ヘテロ]セクシズム」体制の成立条件となる「ミソジニー」と「ホモフォビア」である。本論文では、とりわけヴェルビツカヤやナグロツカヤによる女性向け大衆小説において、それらが、その読者層となるミドルクラスの「女性」たちの欲望を汲み取る／喚起するはずの作品群であるにもかかわらず、その根底には、実は「ミソジニー」が流れていることが剔出される。また、「ホモフォビア」の分析にあたって重点的に取り上げられるのは、ミハイル・クズミン『翼』(1906)とナグロツカヤ『ブロンズの扉のそばで』(および『ブロンズの扉』)であるが、本論文では、ソロヴィヨフやローザノフらに代表される「ロシア的な」当時の性愛思想の言説と、ロシアにも移入された「変質論」やクラフト＝エビングらによってかたちづくられる性科学の言説とを腑分けすることで、『翼』で描かれる男性同性愛は性愛思想に、『ブロンズの扉のそばで』のそれは、(「ホモフォビア」を導くことになる)性科学の言説に依拠したものであることを明らかにしている。このように、「[ヘテロ]セクシズム」体制の条件となる「ミソジニー」と「ホモフォビア」という軸を立て、複数の作品を読解することで、その時代の〈性〉表象のあり方を詳らかにしたことは高く評価することができる。</p> <p>だが、本論文による諸作品の読解はそうした「ミソジニー」と「ホモフォビア」の剔出にとどまるものではない。本論文は、個々の作品を現代的な視点から丹念に読みほぐすことで、そうした「女性」作家たちの作品内部に書き込まれてしまうような、「〈性〉の境界」を攪乱し、「[ヘテロ]セクシズム」体制を内破していく、「非規範的な」〈性〉の多様さを明らかにすることに成功している。これら本論文の試みを言い換えるならば、一方で、「大衆小説」というジャンル一般に特徴的であるといえる「二項対立図式」や「類型化」の様態を抽出することで、この時代の〈性〉を巡る典型的観念の内実を明らかにしながら批判的に検証することであり、他方で、その「大衆小説」の個々の作品を細やかに読解することを通じて、現代のジェンダー論的な視点から、「大衆小説」的な枠組み・図式を超えていくような読解の可能性を救い出すものであるといえ、特筆に値する本論文の特徴であるといえよう。</p> <p>それに加えて本論文が高く評価できるのは、19世紀末からロシアの思想界でひとつのトピックとなっていたその独特な性愛論というロシア固有の文化背景を射程に入れつつも、当該時代にロシアにおいて遅まきながら成熟してきた都市のミドルクラスのなかであらわわれる、「新しい女性」像を鮮やかに活写することで、同時代の西欧諸国において変貌しつつあったジェンダー意識に関する文化研究のパラダイムへと接続することに成功していることである。端的に言えば、本論文は、たんにロシア文学・文化研究の枠組みにとどまることなく、同時代の西欧文学・文化研究との比較や、「世界文学」という視座へと繋がる可能性も有しているといえよう。</p>	

氏名 安野 直

上記のような点で、審査において高い評価を得た本論文ではあるが、審査の過程で各審査員より多くの問いや批判的意見が提起されたのもまた事実であり、いくつか具体的に列挙したい。まず、本論文が対象としている「女性向け大衆小説」がターゲットとする「ミドルクラスの女性読者層」とは具体的にはどのような層であるのか、その「ミドルクラス」を考える際に古典的な欧米のスラヴィストによる当該テーマの先行研究に依拠しているものの、そもそもそれらに先行研究に依拠してしまっているのかといった疑義が提起された。また、たとえば、チャールスカヤの少女小説は確かにジェンダーの観点から読解できるかもしれないが、しかし、本論文でチャールスカヤを論じる箇所では取り上げられている「男装」といった要素は神話やフォークロアなどにも見られるものであり、そうした、いわば文化人類学的な基層を含めて論じる必要があるのではないかという点についても再検討が促された。さらに、本論文で取り上げられる「ヴォリフ社」のヴォリフにせよ、当時、出版業にかかわっていた多くは「男性」であるため、そうした「男性」が「女性向け大衆小説」や「女性」作家をどう捉えていたかという視点が不足している点や、性をめぐる言説を考える際に「キリスト教」という大きな文脈が欠如している点についても問われることになった。また、性愛思想と密接に繋がりのあるシンボリズムのような高踏的な文学作品を対照するのみならず、当時、シンボリズムの作家らに比べて「文学」としてより一般的な読者を獲得していたレフ・トルストイやアンドレーエフ、アルツィバーシェフといった作家たちの作品を対照することで、「女性向け大衆小説」を文学史的に位置づけることも可能だったのではないかという指摘もなされた。それらに加え、ジェンダー論的観点から西欧文学研究のパラダイムに接続するにあたって参照される先行研究が、古典ではあるものの、それ故、すでに研究としての古さも否めず、そこへの批判的眼差しも必要となるだろうということ、そして、本論文でしばしば用いられている「フェミニズム」という語に対する明確な定義づけが欠いており、本論文の主題ではないとはいえ、ジェンダー論的アプローチを採る以上、その定義や、ロシアにおける「フェミニズム」という観念の歴史的経緯に関して、註の中でもかまわないので言及があつてしかるべきだろうことが改善点として挙げられた。また、本論文がいうところの、〔ヘテロ〕セクシズムを内破していくような、「弱者の技」や「戦術」がもたらしたものが具体的にどういったものだったのか、それらについては記されてはいるものの、もっと強く示すこともできたのではないかといった意見も出された。

これらの問いや批判に対する安野直氏の応答としては、本論文の趣旨に則ったかたちで十分に答えられているものもあれば、本論文に含まれるそうした瑕疵を認め、今後の課題として残されるものもあった。無論、こうした批判的見解は、各審査員の本論文に対する望蜀である面もあり、それによって上述したような本論文の有する価値が損なわれるわけでは決してない。したがって、本論文は博士学位の授与にふさわしい論文であると全会一致で判断した。

公開審査会開催日	2022年 1月 31日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・准教授	八木 君人	ロシア文学、ロシア文化	博士(文学)早稲田大学
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	貝澤 哉	ロシア文学、ロシア思想	
審査委員	早稲田大学教育・総合科学学術院 ・准教授	松永 典子	英文学	
審査委員	早稲田大学名誉教授	伊東 一郎	ロシア文学、比較文学、文化人類学	
審査委員				